



2021年イースター



おめでとうございます

2021年が始まってすぐに、ドイツ・エアファルトにお住いの友人ヘルマン・ヴィンデ牧師からお便りを頂きました。その中にご家族の写真と、エツダ夫人(1935-2017)のために作られた墓石の写真が同封されていました。他の墓石と形が違うのが分かるでしょう。それは、ヴィンデ牧師と二人のお子さんたちが「キリスト者の希望」を表したいと願って、特別に作られたものです。

愛する兄弟ラザロが亡くなり、葬られ、その死を受け入れられないほど悲しんでいたベタニアのマルタがいました。彼女は主イエスが来られた時、弟を生き返らせてほしいと願いました。その時主イエスが彼女に言った言葉の最初の部分が墓石に刻まれています。

「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる。生きていてわたしを信じる者はだれも、決して死ぬことはない。このことを信じるか。」(ヨハネ 11:25)



墓石の左側の丸い石は扉で、すでに開かれていて、右側は空っぽの唐櫃(石室)がデザインされています。これは彼女たち(マグダラのマリア、ヤコブの母マリア、サロメ)は、「だれが墓の入口からあの石を転がしてくれるでしょうか」と話し合っていた。ところが、目を上げてみると、石はすでにわきへ転がしてあった。石は非常に大きかったのである。(マルコ 16:3) との聖書の記事から、墓は空であることを示しています。

人は死んで、土に帰り、オシマイとなるのではない。墓の中に納まっているお骨がその人なのではありません。復活された主イエスを信じる者は、肉の体は滅びても、霊の体となって、主イエスと共に生き、主イエスと共に働く者とさせられると信じるのがキリスト者です。ヴィンデ牧師とご家族は、キリストを信じる者として、この信仰を「空の墓」の形の墓石を通して表されたのです。

横浜港南台教会の子どもの教会ではイースターに聖書に書かれている弟子たちの体験をページントにして主イエスの復活をお祝いしてきました。その時に横穴式の墓と墓を塞ぐ石を作りました。



主イエスを墓の中に求めて、墓の前で泣くではありません。天使が **あの方は、あなたがたより先にガリラヤへ行かれる。かねて言われたとおり、そこでお目にかかれる。(マルコ 16:7)** と告げたように、主イエスが出会って下さった私が生きていた処に行き、主イエスがなさったことを想起し、私も主イエスの働きにならうのです。主イエスと共に生きるなら、

死んで、肉体が滅びた後も、主イエスに生かされ、主イエスと共に働いていることとなります。霊の体で働いておられる主イエスと共に私たちは生かされていることを喜ぶのです。永遠の命に招かれている喜びをイースターにしっかりと心に刻み付けたいです。